

資料紹介

加志田亀文俳諧書留

——幕末伊万里の美濃派俳諧資料——

多 久 島 澄 子

はじめに

二〇一八年三月、伊万里市郷土研究会会員の吉原啓二郎、山本進、多久島澄子の三人は、伊万里市立花町伊万里神社の加志田家を訪ねて俳書を見せていただいた。

その中に欠題の写本一冊を見出した。嘉永三年（一八五〇）から四年（一八五二）の月次句会の記録を含み、これで中村鼎山を中心とした最盛期の伊万里美濃派の活動を知ることができるのではないかと思われた。翻刻のための読み会を開始したが、二〇一九年五月で、それから同年一二月まで前記の三人で月一回の解読を行ったが、多久島の転居により二三丁を残して中断した。

その後、多久島が残りを読み、田中道雄先生のご指導ご教授を受け、発表するようにと勧めていただいた。目途がついた二〇二二年三月、吉原啓二郎氏と山本進氏に多久島澄子の名前で発表する了解を得た次第である。

当該資料は、佐賀県伊万里市立花町加志田浩一氏（伊万里神社宮司）ご所蔵の一冊である。横一三・三cm、縦一九・九cm。前後に浅葱色表紙を付し、本文六八丁、内に遊紙一丁含む。書名また編者名などを一切記載せず、試し書きらしい乱雑な墨蹟（落書き）が数箇所に加わる。

当資料は、俳諧作品の記録である。連句二十余巻を中心にし、発句多数を各所に分けて記す。また、発句と脇句による主客の交吟（唱和と呼ぶべきか）を十組、内に含んでいる。連句を形式別に見ると、二四句のもの（短歌行）八巻、一八句のもの（十八公）九巻が主となる。また連句・発句ともに、長い詞書を伴うものがあり、これによって伊万里俳壇の月並み句会での詠が多いことが知れる。また諸作品は、弥生一二日から始まる時系列で配列され、霜月二八日の次は、50丁の表（以下50才）に「嘉永四年」と記す歳旦句が続き、以後も時系列配列で、菊月一三日まで続く。よって、嘉永三年三月から翌四年九月までの作品を収めたものである。

編者（記録者）については、多数の俳号の中で、常に俳号の上に「印を付けられている人物、すなわち亀文ではあるまいか、という推定がまず生まれる。亀文は、当資料所蔵者加志田浩一氏のご先祖、加志田快諱である。亀文は当資料で、「香橘社の座主延寿院法印」（18才）と呼ばれているが、加志田家系図によると、伊万里神社の前身、香橘社の十三代座主が快諱延寿院法印である。後に改名して豊稲と称した。別当職。明治七年（一八七四）六月一日、五四歳で没した。師鼎山の死から三ヶ月後である。

次に、右の編者を亀文とする推定を、裏付けを得て、より正確なものとしたい。

先に、発句と脇句による二人の交吟が十組ある、と述べた。その十組は、

一七丁目から二一丁目にかけて集中的に詠まれている。五月二日は、この月の会主となった亀文宅、つまり香橋社を会場とした例会の日である。発句を十人の仲間（連衆）がそれぞれ詠み、亀文を讃えた詞書の中で、亀文のことを指して、「香橋社の御坊亀文雅兄」「座主延寿院法印」「玄武洞主人」などと呼んでいる。ところが、この十人による十句の発句に付けられた脇句には、そのすべてに作者名が記されていない。言うまでもなく、十人の客が詠んだ発句に脇を付ける者は、当日の主人役の亀文である。それが余白のままであるのは、当資料が亀文その人の私的な書留であることを物語っている。また、詞書に亀文以外の人を讃えた文言がある発句に、作者名を記さない場合も多々ある。23ウの「招き合ふ」、25ウの「短夜に」、26ウの「千歳の」などで、いずれも亀文の詠であろう。亀文にとって、自分の詠ゆえ俳号を記す必要がなかったのである。

連句の間にとりどころ置かれた無記名の発句も、亀文作が多いと思われる。当資料が、この俳壇の月並み句会の記録を目的として作られたものでないことは、記録がない月も多く、記事量が月によって大きく異なることから窺える。従って当資料を「加志田亀文俳諧書留」と呼ぶことにする。亀文は、俳諧では玄武洞とも号した。文政四年（一八二二）生れゆえ、当資料成立時は三〇歳である。

資料としての特色

当資料の特色を考えると、以下のことを指摘できる。

第一に、美濃派による連句文芸の変質状況を具体的に伝えていることがある。

例えば、二四句の連句は美濃派が盛んに作った様式で短歌行と呼び、当資料にも多く見えるが、その連句の末尾に締めとして記す呼称がまちまちである。13ウ・28オでは正しく「短歌行」と記すのに、10ウ・25オでは「仙行」と記す。「歌仙行」とは聞かぬ用語で俳論の基本の用語が乱れている。

次は、61オの詞書に見える、あからさまな無礼講の俳席情景である。主人役の亀文が率先してくだけた姿になるところに、作法の乱れと、俳諧の座の雰囲気としての娯楽性の強まりをしのばせる。発句脇の主客交吟が著しく多いのも、連句形式の衰退を反映するものであろうか。

第二として、素材のローカル性が注目される。

万国の帆柱並べ釜山海 36ウ

港町、伊万里津ならではの国際的感覚と海外知識である。

紛り帆になつてかたむく月の船 51ウ

「紛り帆」は特殊な操船用語で、「間切り帆」が正しく、斜めに張った帆を指す。これもまた港町ならではの作品。

硝子鉢の扱も浮雲ない 3ウ

目鐘の玉はとかく長崎 9オ

蘭瓶に石の油や土の壪 10オ

これら南蛮趣味の素材は、長崎が近いことと関わっている。

方言が現れることにも親しみを覚える。

説法も明日一明日でゞ終るげな 11オ

健でさいあれば浮世の花なれや 36ウ

嫉妬の釘であいがあの一音 60オ

言語資料としては、

早稲が出来たら麦も下げましょよ 12ウ

孫供が土産せぶりにこまります 33オ

川端に御祓の川と読かける 47オ

が、興味深い。

連衆をめぐって

当資料に収められた俳号の延べ人数は、伊万里美濃派俳壇三代目宗匠半升庵鼎山、加志田亀文を含む六一人である。他の伊万里関係俳書、『西の雲』『招く魂集』『松浦』『通ふ夢』『うつゝの姿』『祭る月光』『恩のわかれ』中の俳号を参考にして、別表を作成した。当資料は、誤字脱字等が多く、俳号でも甚だ疑わしい記述がある。55オの山文と、56ウの呉月庵山文とは、雪後庵文山（二代目一番ヶ瀬啓右衛門）のことを誤って書いているかと思われる。文虹と文鴻、姿遊と子遊もまた、同一人物ではないかと思われるが、別表では別項として処理した。

このような中で、特筆すべき人物は、11ウの梅童である。亀文の詞書「半升の師庵にして、美濃の梅童雅坊に初て拝顔を得て、拙き一章を呈し侍りぬ」から、梅童は、美濃から来た職業俳人（俳諧師）であること、亀文が鼎山の庵で梅童に会っていたことが分かる。亀文の香橋社は伊万里川の右岸、師の半升庵は左岸に位置し、距離にして数百メートル内に住んでいる。半升庵から美濃梅童雅坊到来の知らせに亀文は駆け付けたのである。それから間もなく、半升庵が「蕉風の修行地を励まし給ふ」趣旨で開催した五月六日の菖蒲の会筵には、梅童も同座している。時は進み、安政三年（一八五六）四月一七日、美濃以哉派十四世桑原右麦を訪問した半升

庵鼎山は、梅童にも再会を果たした。

これらの美濃梅童坊の来訪の記事からは、佐賀藩松浦郡伊万里郷上中町の半升庵にはこのように美濃など他国から俳諧の客が訪れていたこと、その都度門下の亀文たちが挙って応接していたことが窺える。18ウには、「半升庵鼎山宗匠はよりく諸方の行脚の問尋寄るにことくく是に応じて異ならず。その側に侍る壯士亀文雅士も」と、大齡が、鼎山と亀文の関係を書いている。この大齡の詞書からは、香橋社の亀文が伊万里川対岸の半升庵へかねて親しく出入りしていた様子を彷彿とさせるものがある。

同じく菖蒲の会筵に出席した山代郷久原の三歌亭麦杖こと川浪良助は、嘉永五年一月七日に没し、翌嘉永六年追悼句集『通ふ夢』が鼎山の編集で刊行された。梅童は、弔句「啼て飛ぶ四手の田長や諸弔日」の詞書⁸⁾に、先年、筑紫行脚の折に出会い、俳諧に三世を約し無二の仲となつたと、麦杖をしのび、深く悼んでいる。梅童は、風光明媚な七ツ島を望む久原の麦杖宅を訪れたことがあったのであろう。

宗匠半升庵鼎山と亀文等門下生の関係は、鼎山が私塾を開いていたことに大きく関わる。嘉永三年当時の鼎山中には、幼き頃鼎山塾で学んだ筆子¹⁰⁾が多数いたと思われる。確定できるのは、伊万里美濃派二代目宗匠雪庵文路（初代一番ヶ瀬啓右衛門・天保一五年三月二十七日没）の孫に当たる文和である。松花園文和は嘉永七年（一八五四）一〇月一六日、二五歳の若さで逝去した。実兄雪後庵文山（二代目啓右衛門）の編集により前至忌（六七七日）に追福句集が出版されたのが『うつゝの姿』である。これに鼎山は、「読書も予がおしへ子として、はた、烏帽子打着せて愛せし」と書いている。これにより、文和は、鼎山の読書きの弟子であったことが知れる。続いて「形見に残す四才の子は予が孫なれば」とある。これは、半升庵鼎

山（中村勘二重晴）の二女さゝが、文和（馬場文蔵）の妻であることを言っている¹²のである。鼎山の筆子と思われる人物は、文和の兄文山、文山を親友（29才）と呼ぶ亀文、亀文が「芦丈雅兄は幼少の時分より読書の友」（37ウ）と呼ぶ芦丈へと広がる。

当資料の「七夕に酒ゆるされた筆子かな」（32才）は、鼎山の筆子として学び、三〇歳となった亀文が、嘉永三年（一八五〇）、半升庵の七夕の会席で詠んだ句として鑑賞すれば、趣は一入となる。

鼎山は、天保九年（一八三八）、三九歳のとき次の作品を詠んでいる。「筆子屋に墨の匂ひや五月雨」¹³。つまり、自分の筆子屋（塾）のことを詠んでいるのである。

更に伊万里津ならではの人物を挙げれば、伊万里津で焼物を仕入れ、諸国を商って旅する筑前商人文芳、紀州箕島商人橘里の二人がいる。

23ウの文芳は、呉雪庵文路（初代一番ヶ瀬啓右衛門）の『世事の凍解』（文政二年・一八二九）に、投句している。このとき、俳号文芳の右肩に「チクゼン（筑前）」とある。嘉永七年（一八五四）の『祭る月花』¹⁶では地元伊万里の有志の弥生連に属し、筑前の肩書は無い。亀文が書き留めた嘉永三年五月二三日の会主、筑前出身の焼物商人文芳は、既に伊万里に定住していたと思われる。そして、筑前商人旅行の門出に、離盃の宴を習わしとした文芳ならではの句会開催が、五月二三日の薩摩行興行であったと考えられる。

橘里は、当資料の33才と35才に現れるが、嘉永七年（一八五四）の『祭る月花』8才の橘里の右肩には「紀州ミノ島」とあり、その詞書は次のように書く。

陶器を鬻ぐ産業より年々此地に通ひ来れば、半升庵の社中に入て

行余の楽しみを寄せる折から獅子庵の塚造立に一臂の力をそへてこれにより、橘里は紀州箕島出身の焼物商人で、半升庵鼎山の社中に入っていることが明らかである。

嘉永三年（一八五〇）の呉雪庵文路七回忌追善集『西の雲』¹⁸に、文芳は「手向はや習ひし道の筆つ花」を作り参加している。肩書は付いていない。同年に出た養老舎指孝の一回忌追善集『招く魂集』¹⁹にも参加しているが、これにも文芳に肩書は無い。嘉永四年（一八五二）の半升庵鼎山社中『歳旦帳』²⁰に参加し、「鶯の初音や耳の垢もぬけ」と詠んでいる。嘉永六年（一八五三）の三畝亭麦杖（嘉永五年一月七日没）追善供養集『通ふ夢』²¹では、伊水連（伊万里町の連）に属して「氷けりなみだも俱に手向水」と追悼している。嘉永七年（一八五四）、二五歳で身まかった半升庵鼎山の娘婿、松花園文和の追福句集『うつゝの姿』²²に追悼句を寄せている。『歳旦帳』・『通ふ夢』・『うつゝの姿』のいずれにも文芳の右肩に肩書は無いのである。

右の次第により、文政二年（一八二九）に筑前の焼物旅行商人であった文芳は、嘉永三年（一八五〇）までに、伊万里に定住し、半升庵鼎山社中において、加志田亀文らと俳諧を楽しんでいたものと考えられる。

伊万里の商店街には、石見屋、伊子屋、出雲屋、丹後屋などと標榜する店が多い。焼物旅行商人として往来した人が伊万里に定着したもので、嘉永七年（一八五四）から数えても一六八年が経過しているのである。

資料翻刻

【凡例】

一、漢字はおおむね常用漢字にした。

一、片仮名は殆ど平仮名に改めたが、片仮名表記が望ましいものはそのまま残した。

一、誤字・脱字・難読文字については、()で傍注を付けた。但し、崩し字ゆえではなく、漢字の字体を成さぬゆえに判読困難なものについては□で示し、()内に推定の文字を記した。ごく軽い誤りの場合は、断りなく本文の中で正した。

一、仮名の清濁の別は底本に従った。

一、詞書には、句読点を加えた。

一、文字の大きさは底本に従った。

一、底本は、ほとんど行間を空けることなく詰めて記すが、各所に一行の空き行を設けた。

一、底本は、詞書をも天部に詰めて記すが、詞書部分を二字下げにした。

一、句頭に○や△が付された句は、句の末尾にその旨を示した。

一、本文中の落書きは無視した。

進みたき道の目当も霞かな

文山

怠たらず摘めく筆つ花

半升庵

夏近ふなれば羽織の邪魔にして

楚江

流行医者とは見へぬ惇朴

和来

垣一ト重隔つ町方郷懸り

麦杖

釜の饅飩の味そふな湯気

以文

世を忍ふ笠の月にも仰向かす

指井

鳴立つ沢の一首出来たり

来翅

銀杏のちり葉黄金の色に染み

指山

木綿といへぬ反物の艶

文獅

手の裏をかへす仲居か口車

大齡

解て寐よとは四ツの拍子木

徐風

しとくと外の花くたししとくと

山古

頓て近寄る葵か祭りの

巴洞

書たりな気に入る文字は御家流

「亀文

七ツ道具はいつも御苦勞

」

添しめた跡を掃せる花の塵り

」

花の塵りにもむれる蝶く

」

例に花見月中の二日は、祖翁の碑面墨直しの定式なりとそ。かねて聞

ゆる所なれと、未其の時到るにや、只遙拝し奉るのみ空しく光陰を

費すものそ。今年此日信友のいささない、七尺の影にすかりて賑々し

き一席につらなり侍るも、さは春色一刻千金の交り、風雅の誠を尊み

なをはた道の不易をそなわし玉わん事祈り、有り俣の一句を捧、百拝

し奉るものなりし。

麦杖

深き恩に薄き霞や墨直し

安々坊

揚ヶ雲雀より高く仰碑

半升庵

麗な日ならて明ぬ窓にして

」

溜るとなしにたまる埃なり

和来

「 2ウ

盃の光りを流す作り下戸

指山

腹鼓打て秋の最中に

楚江

是からの道は一里に足るたらず

梅後

女牛の角のまかり過たり

烟波

掛物を掘出ふとは横着な

白鷺

細い城下に広ひ浜松

来翅

咲時は空も酔ふたか花曇り

楳人

蝶に習ふてさらは一睡

文山

孫供かきてはわやくくと

大齡

硝子鉢の扱も浮雲ない

「亀文

横文字の国に等しき恋の道

文芳

短かい夜にはとけかぬる謎

徐風

登りにも下りにも月を詠めつゝ、

児龍

茶碗片手に祭り咄しを

「 3ウ

雑巾の際すれきれと拭ひ椽

赤ひ斗りの金魚ではなし

虚に実に変化を道の花とこそ

教へ和らく正風の徳

右短哥行一折

詩歌の道行わかれとも、

それは中人以下の遊ひかたければと俳諧の正風

に世情を教へ給ふは、全く祖翁の風徳にして、

多か鳥獸草木の名をしる六儀の風雅も外ならず、

天地を動かし鬼神を感せしむる虚実」の扱

いに、疎き身のかこましく席上に髭を撫ること、おもへは恐るへく

顧れば尊ふとむへしと、けふの靈式に筆を採りて

老て震ふ手先にあらず墨直し 半升庵

弥生中の二日は墨直しの正当なれば、春雨の眠気を覚させんと吹聴は

是よし道に「遊ふ徳と云ふへし。されや、祖翁の恩恵四方に普ふして

西海の波濤にも溢れ給ふを、仰きく其の報恩に謝せんと万明山下の

塚前に捻香百拜しつゝ、

直す墨の香に炷き添ゆる蘭麝かな 来翅

祖翁の靈前に催しなりて 入添へん千歳七霞まぬ塚の墨

仰く寄る恩やにしまぬ墨直し 塚に直す墨の香をけふの花そとも

春雨に乾かぬも樂し塚の墨 幾代つきぬ恩にと塚の墨直し

墨直す日や其の徳を仰きく 恐れく直すやけふの塚の墨

仰く塚の花と薫るや墨直し 墨のほる薫にとめん行春を

代々を経ていやます徳や墨直し 春風や舞ひ遊ぶ蝶の羽の工合

春風や花の辺りは和らとぬけ 文芳

「 5ウ

無為窟

「亀文

徐風

文山

文芳

文山

文芳

春風や眠る胡蝶を吹起し

「亀文

」 6オ

春風や湖水にも船の行戻り

大齡

春風や馬壺疋て世を渡り

来翅

春風や名所巡りの友もうみ

わ来

春風や女夫乗り合ふ伊勢の道

兎龍

からくくと管の暖簾や春の風

徐風

ほろ酔いのさまし工合や春の風

梅石

誠吹柳のふりや春の風

指山

春風や軒にひらく宿屋札

楳人

辻巻の跡磯くさし春の風

楚江

和らかな姿を吹や春の風

麦杖

幕杭にふらりく春の風

烟波

干網の目にも留めはや春の風

可嘯

おそ咲きもすんてそれから春の風

白鷺

(前書略)

訪ふ窓や虫集めて友も遊

指井

学ひ合ばや道の茂を

文山

掃き目を埋む松葉のいつの間に

半升庵

浪とふくと寄る浦風

徐風

障とらぬ毛わりもざつと月明り

山古

流石にしふる毛見もうなつき

」 7ウ

春は又其の奥見たし山桜

まつ重麓に床し初桜

千本の中やちらほらはつ桜

(前書略)

覚束の仮り橋よりも暖み川

通し給しを慕ふ此春

炉塞きの埃りを次へ掃出して

振り廻す尾の邪魔な狛也

幾棹をも並ぶ本さす女中駕

松の間にく白帆行きこふ

丸なる影も光りも増さる月

最中の秋の何所も賑やか

喰肥て田舎角力の関らしき

天窓に障るよふな釣棚

きよふろくと何にうるたへて昼鼠

目鐘の玉はとかく長崎

逆上たといふつ、又も置き火達

雪になりたり四方の静かさ

とつこつと筒音一ツ遠響き

社領寺領に御領入組

花の枝手折る無心な子供連れ

ひたしにもよい嫁菜たんごぐ

離座の椽は長閑な南うけ

」 8オ

」 8ウ

」 8ウ

」 8ウ

」 8ウ

」 8ウ

」 8ウ

」 8ウ

」 8ウ

」 8ウ

」 8ウ

」 8ウ

」 8ウ

」 8ウ

」 8ウ

」 8ウ

」 8ウ

」 8ウ

」 8ウ

」 8ウ

」 8ウ

」 8ウ

」 8ウ

」 8ウ

茶宇の袴に泥の飛く
悒気せまいとは咄(うた)なんて居るけれど

雨天続きになりて(余白ママ)

延されぬ日柄も加茂の競馬

瘦家張ても櫛(かみざ)と笄(かんざ)シ

訳のある親子仲とはさらくに

早稲も晩稲も同じ俵つら

請合の店に並んで月の鎌

敵冷(かま)さぬ女又 膳(うづき)ん

乗込の船に銘く芸尽し

五音の外は半歯半舌

蘭瓶(らんがめ)に石の油や土の壚(ろ)

けふも日和かよふて珍重

信届け爰に言葉の花供養

和らく水の閑伽に硯(い)に

右哥仙行一折

(前書略)

問い寄るや額の汗を拭い

端居の俣(ま)に因む初て

黄昏(たふし)に枝からふらり下り 蜘蛛(くも)

扱(あ)テ世の中の静やかな事

張壁に墨絵の月のほんのりと

俄かの冷に老の嚏(くつぎ)メ

説法も明日一明日(あさつち)で、終るけな

大ろふそくの風に流る、

傾城の嘘に出船の繋かれて

馴れく顔に猫も尾をふる

日南(ひみな)から花も次第に開きかけ

重ても見ん麗の笠

半升の師庵にして、美濃の梅童雅坊に初て拝顔を得て、拙き一章を呈

し侍りぬ

何所迄も洩さす徳や薫る風

陶花園にして六日菖蒲の会庭を開き、蕉風の修行地を励まし給ふとの

招きより、予も其の席に推参して拙き一章を呈し侍りぬ

こゝろ置かす誠涼しき座並かな

(前書略)

葺茅(フキ)に夏野、景色移すのみ

涼風運ふ手段いかさま

ヒシ(サ)の隙と云ふは稀成事にして

黒に限りた羽重(二脱)の色

朝月の影にしゃんく助ヶ郷馬

早稲か出来たら麦も下けましょふ

よい便かあらは爰にも御宝仏(フツ)

越し路は北に片夕寄た国

亀文

和来

正宇(マ)

我鶏(わ)

指月

大齡

宇正(マ)

芦丈

正風

以文

文同

徐風

壚文

文和

亀文拜

和来

半升庵

竹波

指山

楚江

梅童

芦丈

さまざまな文句も時の流行唄

乳母か脊中セナにあいらしふ子や

麦杖

毛耀モウカのほのかにもれて花の幕

和調

舞ふて揚葉ユキの蝶も三ツ四ツ

「亀文」

困われか爪に隠居も天窓あたま搔

大齡

私しか膝にこんな涎よだれの

徐風

竿竹の冬の日足のなんの間も

文芳

碓さけすにかゝる宮嶋

徳利のこけてそこらか酒たらけ

出る疝癪カンシヤウカは出し得くく

母親はいつても抱に月さやか

琴柱ことばしらにわたるかりかねの行

突兀とつこつと聳ソツビへし城の櫓ら門

チンファンカンも読る居候

下枝まで残さぬ花の自然躰

自然躰にもぎよふある春風

右短哥行

一郷一社の司たる亀文雅老は、勤ての余力に半升庵の籬まがきに育つて虚
実自在の俳諧に遊る、は風の便りも床かしく、おなし小角の流れを

汲なからいまた拜眉を蒙かぶるに、こたひ月並の観進くわんしん元たるよしを師の
文章に告しらせ給へは、西からの花角力をも土俵の傍に笑はれんに、
わりなき世塵に繋かれ其席上に目見へさることを」浦うらやみ乍ら、拙な

き一章を送り呈するのみ

ゆかしさや道の護摩とも薫る風

洪水

雲の峰にも入らん修行地

「亀文」

美しい艶よと髭を撫られて

半升庵

壹部位の利は取らいても

大齡

其の影も咲塵さかる月の二日頃

楚江

鈴も轡も虫のこへく

芦鴻

隠居ともいゑぬ白塀永屋門

麦杖

目には毒ても酒は切られん

芦丈

あら高な大慈大悲の御誓願

和来

切て建たるよふな岩なり

梅後

自から和らく花の自から

姿遊

瀬田の土産の是か蜷なまこか

顧道

つれ立ッて廿五日の筆子供

指月

色くあれと赤い巾着

兎籠

入船にはつみ出したる戎講

文山

身上りしても此の御客には

徐風

揉紙もみの礫は嘘にまるめられ

文□文

仁王におうの象しやうのりきみかへりて

指山

枝たれた松につらぬく月の玉

来翹

障子はつして置けば朝寒

文芳

庖瘡ほうそうはかるい時分は何所もかも

なんごなんごふ烏帽子くわんぎ着きるも猿さるちへ

短冊たんさくもひらりくくりと花の枝

あい身の友のこゝろ霞かすみます

爰に伊水香橋神の社務たるは亀文雅君にして、行者の教へを慕ひ玉ひ
両部の利益は光を和らけ、素^(もと)り貝の音には其国はさらに五畿七道に
と、^{16オ}ろかし、其功少^(こ)きあらず。しかれば風雅は半升庵の探題馴れ
て三条五条の法式を尊み、人和第一に遊る、其性情に招かれ、けふや
月並の会合にふけりて社中の賑いひとかたならず、隔なき慈愛に
窺^(うかが)き短章に道の機先を寿き、聊^(いさ)当座を償ふのみ
「17ウ

橘や和光の風に匂ふ席

麦杖

古き因^(こ)に異ならぬ茶話^(サハ)

世よの人和におかしみあり寂しみあるへしと 例^(ため)に三条の教諭を得
て、此春より初心一連の同士をかたらひし中にも、けふの会主の三兄
はわけて無二の信友ならば、ともく修行地を私語^(ひやくご)合つ、
「17オ

文山

咲登る葵や学ふ友床し

五月雨晴る、道を樂しみ

香橋社の御坊亀文雅兄は、両部を真卒^(まそ)に流し猶将風雅にも心を寄ら
る、より、けふや月並の会主にして諸風士を招かる、其の懇情を嬉し
み、拙^(おろ)き一句を机下にさしたく
「17ウ

珍らしい庭の愛樹も涼風も

梅後

時鳥とも聞きたきの道

香橋社の座主延寿院法印は、道德拔群にして風雅の道にこゝろを浮め
給ふて、皐月の中の二日、月並の会主なりとぞ。聊^(いさ)の用事にして榮

府へ趣かんときのふ柴の戸を出かけしに、けふの会席に洩る、ことな
かれと楚江^{18オ}「子をはしめ連衆両三輩の□^(論カ)さる、をかん悦^(悦)して、其席に
つらなり一句をつゝりぬ。

世の塵りは被ひ流して遊かな

顧道

こゝろ隔てぬ友ぞ涼しき

とく不孤必有隣と云。爰に半升庵鼎山宗匠はよりく諸方の行脚の間
尋寄るにことく是に応して事^(事)な^{18ウ}らす。其側に佩^(佩)る^(士)壮子亀文雅士
も、神法には葛城山の一流を修行して岩栗山に坊跡^(舎カ)を構へ始め、数多
の兄輩の集り来るは風雅一等の実なるへし。幸^(幸)をうける事度々た
りといへ共、悔むらくは在家になり、たまさか会席に倒^(倒)りぬ。依て拙
き一章を恥すして敬首^(敬)す。
「19オ

五月雨の名に落合ふやこの因み

大齡

濁^(濁)らぬ友と遊ふ涼しき

けふや月次の会式は、徐風・文苜両雅の補助として六義浄清の玄武洞
の座主たらん事、自然の仙境に遊ふの心地なむせらる、
格別な席の風味やほときす
折^(折)から梅雨のしめやかな茶話^(茶話)
楚江
「19ウ

けふや月次の風会として半升庵師誘われ、玄武洞英主へ招かる、は仲夏
中の二日なるへし。されや初てなから、其芳庵をかこふに小庭の愛樹
生茂り、折^(折)ふし皐月の晴くしければ、拙^(拙)きは一しほ床かしく、
只々一章を呈しはへる
「20オ

掃清め玉ふて松の塵る葉さへ

指月

涼風通ふす迄の饗応

香橋社の院司亀文雅英は、両部の道に達し余力に風雅を楽しみて、けふ月次の会庭を催ふさるゝに、其の廻章に洩れさること全ク此神の導と悦ひつゝ、

玉簾の内も香ほるや床の花

芦丈

涼しい姿た移す水際

「20ウ

例の式日を待詫ひし折から、けふや此地の社友を招いて猶はた風雅の興を催し給ふ玄武洞の主、亀文雅英なるへし。其の席に進めは、床には夏菊の香を運び、庭には松の塵る葉を拾いていはん方なきもふけなりけり。去るに連衆の誰彼賑々敷来杖あるにも、会主の心榮かんじて

「21オ

心はれつ内庭に見る夏けしき

芦鴻

客待受るまでの打水

橋月のけふや正門の式日なるか、香橋の社を祈り奉る玄武洞主人の会主なるを、詞友の囁きに推参しはへる。席上には本式を略し、座配の中央に表徳を配られ、去かたき折からはからす席にしとく湿る汗

指山

「21ウ

(前書略)

慕わるゝこゝろそ涼し道の友

文山

信の一字の影による夏

文芳

方丈も庫意(裏)も成就の時ありて

亀文

馬は馬連れ牛は牛連れ

半升庵

初孫に一寸度ても手の離る鎌

指井

伯耆□の好きに好みに

文鴻

行燈は消へてもまゝよ月今宵

徐風

忍ひはくれた恋の肌寒

木後

乗かけに馬士か給仕や岩清水

指井

立寄ればがにの逃げこむ清水かな

半升庵

脱いて来た肌入て立つ清水かな

文山

照りつめた日に滴たるや苔清水

山芳

つはの葉に汲むて呑まん野、清水

「亀文

吞れしと清水に走る小魚かな

「22ウ

草むせる中に一すち清水かな

(行空き底本ママ)

懸香や行来ふ袖の振り合せ

世直しにじいと一声夜の蟬(○印あり)

ほんの山は麓に低し雲の峰

「23オ

五月廿三日頂松楼薩摩行興行

けふや頂松楼文芳雅兄、南国に趣き給ふとて、宗師を始め数多の雅輩
を招き、暫しの離盃を催さるゝに、^{予も}其の発途を見はやして
招き合ふ旅に余波の扇かな

蓼タデに葛に味わへ水も人の気も
半升庵

涼しきさとし受て着る笠
文芳

くだかけの八声七声羽叩いて
楚江

雲井幽なすかに綿の埃りの
指井

子供迄洩れぬ公役の月の鎌
麦杖

濁り酒でも酔ふ時は酔ふ
来翅

熨斗昆布万金丹も伊勢土産
芦鴻

染ほやりの流行も暫くの事
指山

南からさつと一降り通り雨
文山

拍子木打て供を揃へる
和来

奉納の花か見事に挿させました
大齡

恋に狂ふて猫のあちこち
亀文

夕飯の煙りたなひく細小路
芦丈

只よりはちと荷のあるかまし
徐風

両替も式朱に八ツの天保銭
白鷺

明り障子にあられたばしる
姿遊

約束の夜は洗濯もうはの空
半升庵

左も右も耳のかいさよ
大齡

動出す新古の米の相場状
楚江

ためしに成た月のてるひる
顧道

古いにしへへの出丸の跡か真田山
ちさい瓢箪なりと提ましよ
送る身も送らるゝ身も花こゝろ
暖む流の滞りなし

右哥仙行一折

けふやきのへ子に当りて、呉月庵文山亭にて会席を催し給ふ。抑く
此の御神は福德を与へ給ふ御神なれば、宗師を始め数多の雅兄眠りを
忘れ、其のあらたかなる感を脱して、^{予も}一章を呈するのみ
短夜に枝股殖る咄しかな

六月十日大齡興行

古松園大齡雅英は、代々郷村の司を握り玉ふ家柄らにして、野鄙ヒ老若
にも忠孝の道を教へしめさるゝ、其隙には月に花に風交を甘んじ、け
ふや宗師を始め数多の連輩を招請せんと会席を催し其饗応いわんかた
なく、^{予も}平生入魂の中なれば恥へきにあらずと一章を綴り侍りぬ

千歳風の松に調々と薫る風

(前書略)

小懐紙の鎮しづに矢立や席涼し

教間はや道の撫子

聊な流に牛のあらわれて

暮くる、となしに暮、空なり

あ の よ ふ な 眉 と 月 を 詠 め を り

御所の勤も此季までには

山里はいつ迎も斯ふ静やかな

枝から下る蜘蛛のふらく

日本記の講釈ならば御供しよふ

草煙り断ねは止め咳き

世は花の彼岸桜も咲か、り

隅田川原の雁は帰らす

悵気せぬ女房は親の気をかねて

涙で洗ふ余所の移り香

からくと干葉に障る夕日影

船からこ、へ通ふ青蠅

釣揚た鯛をしつかと恵美須殿

落したそふな腰の差扇

塵もなふ晴渡たる月今宵

松もす直に延る杉山

願くは学館詣を式三年

疵に奇妙な油膏葉

口柄に花を咲せてさかい筋

霞汲合併諧の友

右短哥行一折

掛香や耀にも移る御成跡(○印あり)

衛士の焚く煙り中に梅白し(○印あり)

白鷺

和来

姿遊

文山

芦鴻

「亀文

指井

芦丈

麦杖

指山

徐風

文芳

指月

文虹

来翅

「 26ウ

うつは物の成りに随ふ海鼠哉

昼兒や葉を喰ふ虫の葉に巻かれ

泉水の水をさらへて簞(○印あり)

あり丈の肴なあらして青柚かな

「 28オ

爰に文山雅英は、兼て信友なれはとて春の比より其一連の中に誘わ
るゝに、けふや月次の会主とて、土用の煩暑をもいといなく格別に会
席を催さるゝに、其席につらなりて拙き一章を謝し侍りのみ

六月中の十六日、八〇一荳興行

滑稽の友や端居の無礼講

腹書の土用干も此時

紫に濃き紅イの奪われて

後れて駈る馬の嘶く

何所までも並木の松の果もなふ

手のひらに打出す吸殻

さらく歙の輝く宵の月

三形か原に虫すたくなり

物思ふ身は薄きにも心置き

几帳影に巻かへす文

大慈大悲丈ヶ壱寸八部ても

瀧の雫に並ふ氷柱(字足らずママ)

爆炭も何より増しと寄こそり

半升庵

文山

楚江

和来

来翅

亀文

可童

文甫

梅人

白鷺

芦丈

一馬

芦鴻

「 29オ

「 29ウ

粥斗り喰て瘦(やせる)は尤

一 芦

とちからも山坂四里の箱根道

子 遊

昼にはちつと早過る鐘

文 鴻

折くゝと花の便の丁稚どの

指 山

人のこゝろも春は春めき

顧 道

右哥仙行一折

「 30 オ

六月廿五日興行

臨水軒芦鴻雅兄は、家業繁多なる中にも蕉門にこゝろさしを委ね、水

無月末の五日席をもふけて数多の風士を招請せらるゝに、応情(應に情)応して

延られし甲斐に涼しきけふの席

林鐘末の五日なるへし。例の詞友を招き清笑を楽るゝに、芦鴻子の風

信にひかれ折30ウからの煩熱をわするゝ。さて此楼の名を乞せらるゝに

才短かし学乏しければ、前後の思惟にわたらず、臨水軒と名つく。さ

は市井繁栄の□(実カ)に風雅の□(寂カ)を楽しまるゝは、耳を洗い冠の緒を□(難カ)

れよとのむかしき意味にあらず、今日の勤を専にして業余の遊こそ本

意なるへしと聊諷諫の一策をかくなん

世の中の葛にも涌(わか)せ岩清水

半 升 庵

「 31 オ

けふや半升庵宗匠、七夕の祭祀をなし給ふ。其芳亭を見れば床には

□(重カ)茅の葉をしき、片へに浄水を汲み、中に星の影を写して香花・供物

を備へ給ふ。其の席につらなりて拙き一章を手向呈するのみ

静なる雲こゝろあり星の空

「 31 ウ

霧晴れや沢辺の菰の動き出し(○印あり)

勝た方に人の声あり虫合せ(○印あり)

朝兒やまた世の塵りは立ぬ内

七夕に酒ゆるされた筆子かな

文月七日半升庵宗匠興行

(前書略)

抑待し甲斐あり爰に星迎

因みも深き文月の会

白萩の枝重たけにうなたをれ

畏の当りは雀さへこむ(ぬカ)

聊な影もちらくぬくい椽

ねふとてないと下女をからかう

綿打の髪には雪のかきたまい

大店ばかり名護屋本町

いつからか庫理の普請の奉伽帳(伽)

あつたら目鐘(鐘)ふみわりたけな

手を入た丈ケに一きわ花の艶

続く日和も雛の節まへ

孫供か土産せふりにこまります

領所て流行らぬ事を伊勢ては

そよぐと片葉の芦の青嵐

嫁入急くあつらへの縫い

「 32 オ

持参金してやるまではこれやり(字足らずママ)

鶏の冠りひくめつ渡り鳥

ほろ酔て見ても静かな花野哉

待かねて後口向く時花火哉

入月を招く手ふりの踊かな

残蚊や打ふりて見る徳利から

しら露やとまりくく竹の節(○印あり)

入月を招く手ふりの踊哉

残り蚊や打ふりて見る徳利かな(重複)

八月五日峨眉山にて子持の興行

(前書略)

秋の雨やこゝろもちらて友嬉し

月見の約も衆儀一決

種になる瓢は形をかまわずに

尻向である家も隣りなり

服紗掛た台の土産をいたいけな

置棚^(兼)までさかす女房

お寺から参れく十夜鐘

都なりけり雪の竹ノ子

望みなら出きますとんな孝くも

寐て見る山はいつもかわらす

風持^(待)て明石の浦のかゝり船

犬のなふりて鳥がふく

おいらんは疼^(うづき)押させて座にも出ず

酒て吞とはすいな丸薬

傘にひらりくくと短冊の

何所^(どこ)ても魚の町のせはさよ

口を切花に世上の浮立ッて

目出度つくして唄若松

右哥仙行一折

動かれぬ程に咲けり露の菽(○印あり)

鳴子綱引捨に置山田かな

蜻蛉や花には付かて垣の竹

(前書略)

星は何所へ会して居^(おほ)す月今宵

いと、露けき草の小菴

新参も流石と年を誉られて

た、き^(餅カ)も結ひにすりこむ

幅広ひ立町横町狭い町

肴^(肴)仲工の声のつてふと

老しては中く^(中)に炉を離れ兼

熊よりは毛の和らかい虎

万国の帆柱並へ釜山海

半貝甘文のこふ薬

芦丈

山文^(ママ)

指井

指山

師亭

大齡

「亀文

和来

白鷺

指月

可童

楚江

橘里

芦鴻

35

35

34

36

健てさいあれは浮世の花なれや

糶の酒てもよもき餅ても

宝殿の戸ひらもすこしあいて有

左り脇すはたしか正夢

短夜を寐もせて旅に朧ふよくな

漆の嗅サの退ぬ塗の椀

何もかも書集たる知恵の海

銀杏の一葉二葉ちらく

鐘つきも月の天真(カ)になてたかり

吠(ほゆる)は狎の疵てこそあれ

かんにんの額か茶の間の入口に

丹羽さまとは名やら尻やら

巻掛るいつもの管も花の酔

山か笑へは谷か答へたり

右哥仙一折

麦杖

「亀文

芦鴻

一馬

徐風

山古

児龍

来翅

姿遊

「 36ウ

「 37オ

「 37ウ

「 38オ

神無月中の二日は祖翁(忌)の忘定なれば、月花に遊ぶ友から、麓の道を慕

ふて尊霊を拝し給ふ。予にも礼拝終りて拙き一句を捧奉り侍りぬ

幾千代も世に仰かれて薫る塚

麦蒔や烏追ふ子も一加勢(○印あり)

鐘の音に気の急かる、十夜哉

朝霜や取り付いて乗る船の縁チ

麦蒔やよその時雨に気をあせり(○印あり)

呉月庵文山雅兄は、月花にこゝろを浮め給ふ折から、庭前の菊も盛へ

なれはと会席を開き給ふに、予も信友に招かれて一章を綴り呈するのみ

色も香も栄(は)へある庭や残り菊

積めよつめ余力に学ふ窓の雪

言の葉草の招かれぬ影

組合ふた牛商売の手を打て

たたりくくと酒の飄(こぼ)る、

染色もこひ茶納戸茶せんさい茶

後(うし)口を撫る帯下の皴

名月の会のお誘ひいたみ入る

露にきらめく路しの敷石シキ

菩提珠(珠)の実を珠数とは尤な

桂馬(ま)に違(ちが)ふそふな下馬札

「 40オ

「 40オ

情らしい姿た侘しき都風(つむ)

乳母もあきれて雲も掴こい

雲も掴むこいを乳母もあきる、(別案)

何に味のあふてたんすを悪鼠

卅日にせり市とはり紙

こらへたる立小便を国へ橋

扱逃足の早い須田との

わな抜けた鳥も飛こふ花の枝

山の奥にも行き届く春

初雪や思ひ切たる足のかた

馬場先の桜に三ツ四ツ帰り花

放されて雪に迷ふか暖(ぬくめしり)鳥

蘿月園雅兄は人和第一にして、雪月花に余力を楽しみ給ふ。されは、

此春より初心一同に囁きを得ていと頼母しく思ひぬれは、予も其席に招

かれいと嬉しく、取あへす一章を呈しはへる

道筋の迷ひとわはや雪の会

友養老舎翁の風雅について補信の一人なる蘿月園主兄は、合垂にも五

七五の虚実をおしへ今日の誹諧に世清(せう)を愾へらるゝは、惑へ様に言

葉を費さす。さは此霜月初めの会にまかりてかく戯れさへる(つ)

おかし寂しからん霜夜の唯言も

半升庵

合火燧にも別守る道

指井

干店(ほし)に本も金具も広けいて

から紅に勝色はなし

乳母迄もそわく月の祭りまへ

それ吹捨たる鍋の粕ス酒

四下(はみ)もせず嘶く馬を門口に

突出す鐘は建仁寺やら

笑にも涙もろいか老の癖セ

けふと思ひて明日の朔日

さまざまに並立たる花の鉢

あふない虻か庭からも出た

手にあまる子か一町に式三人

大きな文字をぬり上壁(し)

蒸暑い風も涼しふ吹返し

云まきらして恋の逃尻

しらすにか日高の川の昔しかたり

九十九筋きへたもしひ

いつのまに式十六夜の月しろが

判金出して嫩る新そは

日本に隠れないから日本橋

寐ころ(ひ)て入る犬の横着

世に連れて神も和(やはら)こふ花ころろ

花ころ(は)ともかゝる附合(つ)い

楚江

指山

姿遊

可嘯

和来

徐風

芦丈

如鶴

来翅

可童

亀文

大齡

文山

一馬

指月

兎籠

「42ウ

「42オ

「42ウ

「41オ

「41ウ

「43オ

一郷一社の司たる五々園の主しは、人和第一(八脱)のなりき。されは梅人雅
兄行の余あられば月花に心をさらし給ふ。依て尊ふ川神の威徳にや、
他力本願の鳥井けふや棟上とて賑く敷43ウ「秘法を修し給ふ。余も同し小
角の流を汲みぬれば音信にいと嬉しく、麓の道を慕ふて三条五条の教
へを聞んとて、拙き一章を綴り呈し侍る

梅か香も高き新らし鳥井かな

剪鷹(きりたか)の空雲(つが)抓む行衛かな

冬牡丹畳の上に散にけり

首出して鼻息き白し網代守り

梟や昼は一しほ寒き顔

山茶花や匂ふともなき日南(ひなな)かな

(前書略)

遠近の友招かれて花八ツ手

此の寒む空に抜を本懐

あるか中に田舎とふふのかとふして

小さい川に埃の流るゝ

三日月の顔拜ませぬ孫子共も

扱も身にしむ風のそわく

嘘長い瀬田に唐金擬宝珠の

何の千話(ちい)やら過半切文

邂逅に遠ふては夫と岩田帯

暁告る鳥の声く

瓢箪も割子も持(か)く花の比
硯の水も人も和らく

探せく我も人りよ斥鷃(みそぎ)

葉は馬の餌に茹れて石路の花

孫共に墨付られし紙衣(かみこ)かな

冬牡丹畳の上に散りにけり(○印あり)

懸香や氈にも移る御成跡

壳(しほ)□(墨酒の)や木の葉に交る斥鷃

葛水に蜜を誘ひ、氷砂糖に煩暑を忘れ、懷水草(なご)再会、霜降り月末の八

日也。左は老主人其柳雅英は宗偏の茶礼にくわしく、折く台子に松

風の音を観じてしよふせん(せん)の気を養ひ、其一椀の茶に眼を開きたま

ふ。蕉風の道を匠(たくみ)を示し申さるゝ、芦鴻風土に、聊の虚実をへたてな

き趣を興して

茶の花や風雅の侘も同一味

世上のらちを爰に不断炉

馬土(ばつち)に□し(種説)ふ声はないかして

いつてもなへる納手(納力)なりけり

くすくすとなんほ銀(ぎん)ても指きせる

持事すかすこちの祖父様

ちらほらと窓から三日の月の影

はた織も虫つれさすのも

釣合ぬ恋に出代る身をくやみ

おれも刀を鋏に替る気

45オ

45ウ

宗

芦鴻

大齡

白鷺

和来

文山

楚江

子遊

芦丈

可童

46オ

移(往脱)まふ所の名をも米の山

「亀文

」 46ウ

続く時には続く日和りの

指月

川端に御祓の川と読(悉)かける

徐風

真水はかいたはかりてもよい

有間にも増る府中の竹の艶

余所の家ではしれぬカタカナ

開(悉)かんぬも結句床かしき花なれや

鳥も百千と寄(懸)て振か

」 47オ

臨水軒芦鴻英士の廻文(うなづ)に懸頭(うなづ)き、霜見月末の八日、宗師始め賑く敷

蕉風の道を論して、三椀の茶に眠りを廃して待るのみ

冬の月やこゝろの塵りもなきひと夜

」 47ウ

(前書略)

世は年の市の騒きに庵静

発句の懸を払ふ此会

伯父甥の間柄らにも様付て

ひんと匆(はむ)たる生鯛のひれ

道法りも船と陸とは弓とつる

目当(間)に聞(間)ふた成(な)はどの松

月の出も今暫くは十八夜

嘘(あは)らしふ吹(分)やんで野合(分)の

天窓(あたま)たゝいてひろくを無息(意気)きのみ

多い羅漢の中にひんつる

」 48オ

何所(何)かも角(か)もたらりく(と)岩隼

昼(現)さへも初鳴く時鳥

其唄をとふそ私しか扇子にも

若草の飛く青し小石原

(遊紙表)

(遊紙裏)

嘉永四年

亥歳旦

とちらから遊(そめ)ひ初(そめ)ふか花の春

人日

前髪もおろして来たり若菜売

春興

取退(とりのけ)る釣菜の縄や窓の梅

若草の飛く青し小石原(再出)

戌の年尾

年の夜や常は宵寐の庵ながら

起雲窟兒龍雅兄は人和第一の逸人なりき。されは、家業の余力あれば

風雅にこゝろを寄せ給ふ。予にも一同に学(予にも)ひ合ひしにけふや詞友と会す

るとて懇情に招かれ、拙き一章を待るのみ

梅は花の兄なり共に遊ふ道も

きのふは大福帳に売業の余力を祝ひ、けふは小懐紙に余力の輩諧(俳)を試

」 50ウ

」 49ウ

」 49オ

」 48ウ

」 50オ

んと、諸友を招きし起雲窟に杖を曳いて

解合ふや硯の海に氷る気も

宗匠

春の恵みを得て開席(ひらき)

児龍

巢こほれの雀さへつりく〜て

可翁

撓みやすさの小篋なりけり

指山

濡て来た稚子(ななこ)の髪撫てやり

楚江

ついで砕けたよ袖のせんへい

大齡

紛(まぎ)り帆になつてかたむく月の船

和来

伝授物けな夜の朝兒

来翹

祭りにと庄屋惣領さそい出し

亀文

腫てはいぬか其鼻かふら

徐風

張である片山のちらし山らしふ

文山

枯木枯柴からむ葛城

芦丈

楯(たて)焚て頭陀(つひ)の苦れを休めさせ

芦鴻

恋の付句に笑ふ連中

可柳

一ト下りにてはまいらせ候かしく

文芳

糸を伝ふて登る曲独楽

棹(せう)しめてもしつまらぬ花こゝろ

隴月夜の価千金

桃咲やこへの立場を立直し

可童

雉子啼や山の帯をもきへるこゝろ

児龍

子を寐(ね)て出代る乳母かこゝろかな

可童

「 52 オ

例に花見月の中の二日は翁塚の墨直しなれば、宗匠を始め社友賑く

敷誘い集り、香花浄水を備へ風雅の識心(し)に百拝して、なをはた道の感

応を祈りく〜て、拙(せつ)き一章捧奉のみ

代々を経て薫り弥増す塚の墨

「 52 ウ

(余白)

爰に移す都の春や墨直し

「 53 オ

仰けは高き花の碑(いしづみ)

宗匠

おかしいふしの流行唄なり

山古

(余白ママ)

姿遊

晴れやかな月のまるとの四方窓

指井

唯(ただ)か扇子やら箔の露けき

楚江

はしたのふ世を忍ひ身を忘れつ、

和来

山の名にさへ馬にくら置

楚江

紅に染の幡たひら〜と〜と

来翹

常は無口な正直親父

「 亀文

咲盛る桃に桜の南ミかけ

指山

舞(まひ)ひ草(くさ)臥(ふ)はないか胡蝶の

一馬

また闇い内に筆子の誘い立て

可童

袴のひたのあるもあらんも

可童

用水に笕樋の夕立濤〜と

児龍

下女(したむすめ)か手引(てづか)に逃(は)す誤

「 54 オ

何にも云す思ひに瘦た貌を見せ

心斎橋に医書はいくらも

新蕎麦の湯気に曇りて月の影

質の裕のきのふよふやく

不思議にも生田の宮の二度の□(麻カ)

女浪男浪に尖る岩角

鳥は啼花は笑ふて永日を

霞の八重も深らぬ道

文芦

山文

「 54ウ

雪後庵文山雅兄は、代々正風にころを浮め、今宵七夕の会主を勤て床に浄水を涵へて、星の影をうつし香花を備へ給ふ。其席につなり一章を呈しつ、

(前書略)

空頼めならぬ逢瀬や天の川

船にも似たる美月の影

鈍豆を八升豆とまちこふて

姨さんの茶の笑いこほる、

繫かれた柱くるくもらい狎

西に直れは□□風なり

島田にて主人失ふ渡り物

痢病の小便は苦しき

塵り塚はちりに芥に置霜の

歩金の脈の一ツ冬かれ

女房を持て見たいもむりならず

けふは寅日翌日は返報

中くに出雲宮の神さひて

赤い紙やら白い紙やら

無筆でも胸の帳面慥なそ

寛政十二京和三年

孫枝から彦はへまでも花の春

宗匠

文山

来翅

指井

楚江

大齡

一馬

里蝶

「亀文

和来

文芳

徐風

可童

芦鴻

「 58オ

啼出して身は葉蔭に蛙かな
拍子よふ汐間にがにも田打かな(○印あり)
風の手もしのふて藤の花曇り
長夜や京に行くも宵の夢

(余白)

呉月庵山文雅兄、七夕の祭祀をなし給ふ。其の芳亭を見れば、床には

□茅のをしき、上に浄水を汲み、中に星の影を写して香花供物を備へ

給ふ。其席につなりつ、一章を呈し侍るのみ

浄なる雲もこゝろあり星の空

冠のかた向までも夏の月

関取りの汗をふかせて氈の上

あみ引も当てのちこふや沖なます

涼風も一ト筋見へて川の岸

晒し場に妹と増さりし姿たかな

鳥も手を聞わけ来る鶴飼かな

「 57オ

炬塞き前に杖をかならず

哥仙一折

58ウ

ちと霞たる瓢の艶

文芳

鯛(ひぐら)や釣(つ)に垂れたる岸の松

世に有りし孝は届かて魂祭り (○印あり)

立秋や蔓ものゝ手の動きふり (○印あり)

涼風や産出かも園の竹

椽(か)に且(かつ)く虫干の隙

一筋の琴に五音の備りて

ふツたる跡の星のきらく

真丸ふ輪にたくらせる碇り綱

酔か醒(の)れは咽(のど)のからひる

松陰の月を欄間の生影に

勅使下向の沙汰も此の比

落鮎(あ)の寸も揃へて籠(か)ながら

又伯父さんの響(か)にふり聴(か)

かく程に猶かゆふなる尻のかさ

有馬は馬も牛も往(か)き行(か)ふ

続きたる杉の立木の真闇(くら)く

嫉妬(あ)の釘(く)てあいかあの一音(おと)

業平も観音経を誦覚へ

式貫の銭につまるものまへ

塵(ちり)も咲(散)もありてそ花の浮世なり

鶺鴒(れん)に追れく(つ)て鮎(あ)の瘦(う)にけり

草の花や引捨(れ)らたなりに咲(さ)き

稲妻や座禅の僧の後口向き (○印あり)

前会に下手鍛冶の約を得て一卷に魂祭の高(たか)と撰(ひら)はれ、掟(おと)に任せ

会主を勤侍るに、残暑甚しふして礼讓に堪かたければ、師命(しめい)をかふて

腰の扇(あ)をいかめしきを団扇(やほら)に和(や)けて、理屈(りくつ)の腹(はら)をわすれて円居(まどろ)にく

つる解(ひ)、裸(はだか)は得手の亭主(ていしゆ)ふりもおかしく

退かぬ暑(あつさ)にいさや無礼講

一瓢舎主人は虚実自在の俳諧(はいかい)に遊(あそ)び給ふにそ、前会の句合(くあひ)に大奥(おほおく)の巻

を取られし事自然の道理(ことわり)にして、其祝(いそ) 燕(つば)しく宗匠(そうしやう)の芳亭(ほうてい)にて賑(にぎ)く

敷会席(しきかい)を開き給ふにそ、一章(いちやう)を興(おこ)し侍るのみ

雨も止(と)んで猶(なほ)く晴(は)し角力草

浮世の塵(ちり)をいとひ仏(ぶつ)になれて丸めらるゝ頭(かぶ)にはあらず、累世(らいせい)の医業(いぎやう)に

束髪(さくぱつ)のあふらけをはなれ、扨(か)後の俳席(はい)に肩衣(かた)の廉(か)を和(な)らけ、かの両全(りやうぜん)

にあらたに涼(すず)しき朝雲(あそ)主雅(しゆが)のすかたをひらやかみ賞(あ)して

愛(あい)さるゝふくへ類(たぐひ)や撫(な)てくらへ

こゝろも騰(の)す月のすみ酒

丹頂(にんてい)の鶴(つる)は舞(ま)ひく渡り来て

広(ひろ)ひ海原(うみ)広(ひろ)ひ新田(しん)

60ウ

60ウ

60ウ

60ウ

61オ

61ウ

61ウ

61ウ

61ウ

62オ

62オ

62オ

聞けかしに余所の息子を誉て居り

指山

障子つくろふ粟のそく飯

大齡

ちらくくと佐野のあたりの夕日影

麦杖

聞(わ)か(く)しい事しらぬ牛なり

芦丈

留守番の用にも立ぬ居(ふ)そろふ

可童

尻(む)のぬふとにんにくの灸

(余白)

朝雲亭の主し楚江英士は、広く肘後の方を施して民を済(すく)わんと此の

伊水に僑居ありしか、けふや頼母の汐も満(ち)くたるに薙(はつ)髪の祝筵を

開き、数多の社友を招請せらるゝにそ、(子)又拙(ち)き一句の祝章を綴り

呈し侍るのみ

充ちくく(て)て高き其名や頼母汐

連れ合いも男はかりや初桜

藪入や妹との髪を結(て)ふやり

出して来た枕おさへつ時鳥

落着ぬ沢辺の鷺や青嵐

いつ間(の)にこふ積たのか夜の雪

あな取りて酔いすこしたる新酒かな(△印あり)

朝夕に替る肌着や秋の風

鬼灯や鉢植にする尼の寺

御成座(こ)に(こ)翻(ぼ)る、砂や鶉籠

毛見役も一ト元かるは表向き

向から来る人はなし秋の暮れ

霧深し問へはこへたる一里松

の木札は菊の根に詠め(改案)

舞い鶴書いて落たる菊の札(○印あり)

影法師のちぢみて見へつ後の月

新蕎麦や頼母か里から送りけり

深かしても雨聞く夜の長(さ)かな(△○印あり)

たと思ふて寐たに(改案)

蜻蛉や六部と二人り連れ修行(○印あり)

身の上を明す友欲し後の月(△○印あり)

蜻蛉や一本高き垣の竹(○印あり)

新蕎麦やよし追分の峠茶屋(△印あり)

蜻蛉や風に響(む)ふて羽(う)の居(す)り(△印あり)

名札には□い月(め)を満(み)る菊見かな(△○印ありて抹消)

半山亭松左雅君は、朝は鳥の声に目を覚し夜は蕉門にこゝろを浮め、

菊見月中の三日会席を催し道近の社友を招き風雅寂を楽しみ給ふに

よりて、(子)風信の交りを得て拙(ち)き一章を呈し侍るのみ

自ら薫りも高し菊の会

菊見月中の三日半山亭松左雅君興行

嫩(わか)の連のもへ出る頃よりうらなく推敲せし半山君の主雅や、其事の

繁きになたされし辺三五年中絶しか、名月の会合より再び此韻(じゆん)に寄ら

れしか、流石旧切あらわれて時鳥の声雲間に高く、其の時の約をたか

へす、社友を招かるゝは后明の夜なるにそ

天晴そ道の月見も二度の駈カケ 半升庵

新酒の酔いにけかの高名 松左

聊（い）な谷の流れも秋すみて 麦杖

ことんく（い）と斧コタマの山彦コタマの 可童

昔し読る孫（い）子（い）寐（い）かけるいたいけさ 指井

こゝろたされはにへぬ夕飯 烟波

磯松も風に競ふて鳴く千鳥 半菫

今のは何所の御仏寺の鐘 召道

見すしらすなから女中のなれやすく 大齡

送上（の）せ（の）にもよい神奈川葉 亀文

丁（つ）違（が）い離れか、た破（つ）れ屏風 荷香

札入止めてこれからわせり 扇舎

女房は恋の手筈をして籠り 如鶴

おれか木履は唯（誰）れぞ借たか 芦丈

薩摩垣とふして犬のくゞり明け 里蝶

ばはんと云ふかやはり唐音 一馬

詩に哥に誉めく登る花の山

春成り呑も吞ぬも徳利

（余白）

謝辞

本稿作成並びに発表にあたりましては、ご所蔵者の加志田浩一様にご協力をいただきました。感謝申し上げます。

伊万里市郷土研究会会員吉原啓二郎様、山本進様には長い間お世話になりましたありがとうございます。

佐賀大学名誉教授田中道雄様に全面的にご指導ご教授をいただき発表することができました。ありがとうございました。

【註】

(1) 伊万里市郷土研究会は、昭和三四年（一九五九）に発足し、会誌『烏ん枕』を発行してきた。令和二年一月現在一〇五号。

(2) 加志田家は、代々香橋神社の宮司を務め、加志田家文書は伊万里市史等の資料に使われており、加志田家所蔵の『西の雲』には、亀文の箇所「が付されており、加志田亀文のことを知りたいと願っていた。

(3) 中村鼎山（一八〇〇～一八七四）は、伊万里美濃派俳壇第三代宗匠を三十余年に亘り務めた。山本進氏の高祖父山本源右衛門も「映雪軒富籠」、「一陽亭至梅」の名を鼎山から付けてもらっている（佐賀美濃派俳壇誕生前夜の地・伊万里⑤半升庵鼎山と映雪軒富籠）『葉隠研究』八一号、平成二八・二〇一六年）。

(4) 吉原啓二郎、山本進、多久島澄子の三人は、「伊万里の俳諧史料を読む会」と名付けて二〇一六年四月から月一回、山本進氏所蔵の俳書の解説を始めた。

(5) 加志田家蔵「諸神社敷地其外附出扣帳」（明治四年加志田豊稲記）に基づいて多久島が作成。ここには略す。

(6) 明治二九年、花島芳樹編者の「伊万里歳時記・花島芳樹随筆抄写」24オ・ウには郷社香橋社の由緒が次のように書かれている。「井手左大臣橘諸兄公（筆者註、六八四～七五七）也、伝テ曰、人皇四十八代称徳帝（筆者註、七七〇年）ノ御宇常世ノ国ヨリ橘ヲ献ス。是ヨリ先、十一代垂仁天皇ノ御宇田道間守ヲ使シテ常世国ニ非時ノ香果ヲ求メ玉フコトアリ、香果橘ナリト云常世国ノ事未考、其船当津ニ着岸シ岩栗山ノ景勝清浄ノ地ナレハ賞シテ橘ノ実ヲ植ヲカル、和歌ヲ納メテ

68ウ

68オ

67ウ

67オ

66ウ

橋諸兄公ヲ齋キ祭り橋宮ト称ス…後略…。香橋神社は、昭和三四年に戸渡島神社を、昭和三七年に岩栗神社を合祀して現在は伊万里神社となっている。

(7) 田中正義『丙辰日記―中村鼎山安政三年の道中記』一・二(『烏ん枕』五五・五六号、一九九五年)によれば、安政三年二月一九日、五六歳の鼎山は、文山と伊勢詣でをし、美濃の右麦・轡化、江戸の書家雪城を訪ね、帰路図らずも美濃の右麦宗匠の臨終を看取っている。その一四〇日に及ぶ旅行記によると、安政三年四月一八日、美濃市ノ瀬の桑原右宅宅で梅童に会い、翌日から一門の俳友と歌仙を楽しむ、二四日、梅童の案内で養老の滝へ登り千歳楼に泊る。

(8) 「先のとし、筑紫行脚の杖をとめて、俳諧に三世を約して無二の中なりし三畝亭の主人、去年の霜月初七日なき人の数に入申されしとの訃音も海島を隔ぬれば、漸この卯月の初に驚き、久原の空をながめく」。

(9) 鼎山の開塾は、田中時次郎氏の「伊万里市内の寺子屋並に塾師」(『烏ん枕』三五号、昭和六〇・一九八五年)によれば、「伊万里漢詩塾、中村鼎山、天保〓明治初」とある。

(10) 塾に学ぶ者。

(11) 「明治四十四年家系簿」は、中村勘二重晴(半升庵鼎山)家を継いだ中村千代松の五男馬場昌五郎(明治一七年生・馬場弘助の養子)が明治四四年七月作成した。この「明治四十四年家系簿」によれば、松花園文和は、俗名馬場文蔵。父親は一番ヶ瀬治左衛門、母親は喜多いし、祖父は初代一番ヶ瀬啓右衛門、実兄は二代目一番ヶ瀬啓右衛門、妻は中村勘二(半升庵鼎山)の二女さゝ、子は馬場弘助。弘助は幼少時、おばの家馬場家に入る。

(12) 中村勘二重晴(半升庵鼎山)には男四人、女五人の実子があったが、男は千代松(弘化四年生)を除き早世している。二女のさゝと末子千代松の間には六人いる。家を継いだ中村千代松には九人(男八人、女一人)の子があったが、二男・五男・七男・八男の他は早世している。長男欽一は、東京帝国大学法科在学中に死去し、二男郁次郎が家を継いだ。「明治四十四年家系簿」の所有者は、中村家現当主中村勘二氏である。中村勘二の名付けは現当主の祖父郁次郎氏。郁次郎氏が自らの祖父勘二重晴(鼎山)に因み命名した(現当主中村勘二氏直話)。

(13) 路号編『香の霞集』(天保九年)に鼎山は旧名、古童で投句している。天保二年の『常盤の青葉』には「樗庵古童」の名で投句。天保七年の十方庵雲左坊の『古稀賀集』には「古童改鼎山」とある。

(14) 前山博『伊万里焼流通史の研究』(誠文堂印刷、一九九〇年)によれば、筑前の商人の仲間規約「陶器組仲間方極一札」(弘化三年・一八四六)に、筑前芦屋商人は四〇人、筑前山鹿商人は二九人とある(六二八頁)。伊万里商人と芦屋商人の関係を物語るものに、福岡県芦屋町の芦屋岡湊神社に天保一〇年、伊万里商人七三人が寄進した石燈籠がある。その中に岩本佐兵衛(羅月園指井)と岩本清吉(指山)の名がある(六二四・二五頁)。

(15) 肥前伊万里から仕入れた陶磁器を売捌くために江戸あるいは関東地方へ赴いたので「江戸通い」の名のある紀州陶器商人については、『箕嶋町誌―たちばなの里』(昭和二六年)ならびに『有田市誌』(昭和四九年)により知ることができる。略：由来とその時期について、「黒江産漆器販売のため九州方面に赴いた箕嶋商人がたまたま伊万里陶器の名声を知り、江戸で販売することに着想して始めたのが起り、寛文(二六六一・七二)頃のこと」という(『伊万里焼流通史の研究』六四頁)。

(16) 加志田浩一氏所蔵。浩一氏が宮司を務める伊万里神社の境内に芭蕉翁と獅子庵の句碑が並立され、嘉永六年二月七日に塚供養が開催された。その記念句集が、嘉永七年(一八五四)出版の『祭る月花』である。

(17) 芦屋商人の旅行の起源は、諸国商人の伊万里への往来がはじまったという元禄(一六八八・一七〇三)・宝永(一七〇四・一〇)ころと思われる。…芦屋商人の旅は文政(二八一八・二九)・天保(二八三〇・四三)期がもっともさかんだった(『伊万里焼流通史の研究』六二・二三頁)。

(18) 山本進氏所蔵。山本進氏の高祖父は半升庵鼎山中で山代連に所属していた。

(19) 山本進氏所蔵。

(20) 山本進氏所蔵。

(21) 山本進氏所蔵。

(22) 山本進氏所蔵。

(佐賀歴史研究会会員・伊万里市郷土研究会会員)

別表 加志田亀文俳諧書留の人物一覧（掲載順）

多久島澄子作成

No.	俳号	俗名等	住所・没年等	他の俳書への参加状況						
				嘉永3年1850 西の雲	嘉永3年 招く魂集	嘉永4年 松浦	嘉永6年 通ふ夢	嘉永7年 うつゝの姿	嘉永7年 祭る月花	明治7年 恩のわかれ
1	雪後庵文山	二代目一番ヶ瀬啓右衛門、初代の孫 妻は蘿月園指井の妹（招く魂集）		○	○	○	○	○編集	○	
2	半升庵鼎山	中村勘二重晴	明治7年3月11日	詞書・識語	詞書	歳旦帳編集	詞書	詞書	蕉蓮塚供養	供養追善
3	朝雲亭楚江	伊万里津医者「西の雲」に裏尾と肩書		○	○	○	○	○	○	○
4	和来			○	○	○	○	○	○	○
5	三畝亭麦杖	久原、川浪良助	嘉永5年11月7日	○	○	○	○	○	○	○
6	以文		松花園文和の親戚	○		○		○	○	○
7	蘿月園指井	三代目岩本佐兵衛	明治12年12月27日	○	編集	○	○	○	○	○
8	来翅			○	○	○	○	○	○	○
9	指山	岩本清吉：指井弟	明治12年7月30日	○	編集	○	○	○	○	○
10	呉竹園文獅	一番ヶ瀬治左衛門、初代啓右衛門の子		編集	○	○		○	○	○
11	古松園大齡	代々郷村の司を握る家柄		○		○	○	○	○	○
12	頂松楼文芳	『世事の凍解』にチクゼン文芳		○	○	○	○	○	○	○
13	徐風			○		○	○	○	○	○
14	文虹	15ウ・27ウ		○		○				
15	山古		松花園文和の親戚	○		○		○	○	
16	巴洞									
17	玄武洞亀文	加志田快諄（豊稲）	明治7年6月11日	○		○	○		○	
18	安々坊	前名釈一笑		○	○	○				
19	梅後		楠久	○		○	○		○	
20	煙波・烟波		浦ノ崎	○	○	○	○		○	
21	白鷺	半升庵鼎山の兄（恩のわかれ）		○	○	○	○	○	○	○
22	樸人・梅人	五々園（43ウ）	一郷一社の司	○		○				○
23	起雲窟兒龍	商人		○		○			○	
24	無為窟									
25	梅石									
26	可嘯		大川野	○		○	○			
27	文古									
28	姿遊	姿遊医伯の刀圭（通ふ夢）		○	○	○	○		○	
29	疋字カ									
30	我鶏カ									
31	指月	妻は蘿月園指井の妹カ（招く魂集）		○	○	○	○		○	
32	芦丈			○		○	○		○	
33	正風									
34	文同									
35	壚文									
36	松花園文和	馬場文蔵 妻は鼎山の二女さゑ	嘉永7年10月16日 父は呉竹園文獅、兄は雪後庵文山	○		○			追善 亡文和	○
37	竹波									
38	梅童	美濃の梅童雅坊					○			
39	淇水	大成木、淇水道士の法力（通ふ夢）		○	○	○	○		○	○
40	臨水軒芦鴻			○		○				○
41	顧道		楠久	○		○	○		○	
42	敲道		楠久				○			
43	文鴻									
44	木後									
45	可童	妻は蘿月園指井の妹カ（招く魂集）		○	○	○	○	○	○	○
46	文甫									
47	一馬		松花園文和の親戚	○		○	○	○	○	○
48	八陣一芦									
49	子遊	30オ、46ウ								
50	橘里	『祭る月花』には「紀州ミノ島橘里」とある					○		○	
51	如鶴		楠久	○		○	○			
52	可翁									
53	可柳									
54	文芦									
55	里蝶									
56	扇舎						○	○	○	
57	霞江									
58	蛇足			○	○	○	○		○	
59	半山亭松左				○		○		○	○
60	半菅									
61	召道									
62	荷香						○	○	○	